アメリカン・ボードの日本伝道 1883—1890

——日本ミッションと北日本ミッションとの抗争を通してみた——

本　井　康　博

I　北日本ミッション[1]の成立

アメリカン・ボード (American Board of Commissioners for Foreign Missions) は新潟におけるエディンバラ医療宣教会 (Edinburgh Medical Missionary Society) の事業を1883年の秋にひきついだ。同宣教会の医療宣教師，パーム (Theobald A. Palm) は休暇を得て「帰国せんとするに当り当時岡山に在った［アメリカン・ボード日本ミッションの］ベリー氏に譲渡しの交渉を為し又自ら京都同志社に赴きデビス氏に面会新潟及び北越地方の伝道を委託した」。[2]

この時，医療宣教師のベリー (John C. Berry) は後に見るように前向きの姿勢を示したが，デビス (Jerome Dean Davis) は「摂理に満ちたかの地の声が大層強力なので拒りきれない」とやや消極的であった。[3] パームはバプテスト派の信徒である[4] にもかかわらず，他教派のアメリカン・ボードに留守中の事業のひきつぎを要請した。パームを「実質的には会衆派主義者 (Congregationalist)」とみるアメリカン・ボードの宣教師もいたが，新潟進出に意欲的なミッションが他に見当らなかったことと，パームは来日以来かねてベリーに私淑していたこととが主たる理由であろう。[5]

1883年7月10日に神戸のギュリック (Orramel H. Gulick)[6] 宅で開かれた日本ミッションの特別会議で，新潟に新しくステーション (Niigata Station) を創ることが正式に決定された。議事録 (minutes) によればベリーは岡山から賛意を示す書簡を送っている。

実は，このひきつぎの件はこれより半年前の夏，日本ミッションのペティ (James H. Pettee) とケリー (Otis Cary) とが新潟にたち寄ったさいパームから非公式に切り出されていた。ペティ（岡山）は，関西を活動拠点とする日本ミッション（ステーションは京都，大阪，神戸，岡山）からあまりにも遠隔地のため当初は新潟ステーションの設置に大きな疑念を抱いたが，新潟からの要請があまりにも強いため，ついにそれを「神の声」と思うにいたった。[7]

こうして日本ミッションは関西から新潟へメンバーを派遣することになった。9月30日には

本稿は同志社大学アメリカ研究所の第1部門（アメリカン・ボード日本関係文書の総合的研究）研究会での発表（1986年10月25日および1987年6月27日）を再構成したもので，拙稿「T.A. パームとアメリカン・ボード北日本ミッション」（『潟』4，日本キリスト教団新潟教会，1987）と補完関係にある。

1. さしあたっては拙稿「アメリカン・ボード北日本ミッション」（『新潟県大百科事典』新潟日報事業社，1977）を参照。
2. 湯浅與三『基督にある自由を求めて——日本基督組合教会史』(1958) 200ページ，［　］は本井（以下同じ）。なお，詳しくは拙稿「T.A. パームの帰国とアメリカン・ボードの新潟進出」（『社会科研究』22，新潟県高教研，1978）を参照（以下「パームの帰国」として引用）。
3. Letter of J. D. Davis to N. G. Clark, Jul. 16, 1883. 以下，クラークあてのものはあて名を省略。
4. 『天にみ栄え——宮城学院の百年』（宮城学院，1987）61ページ，註7。
5. 「パームの帰国」34ページ。
6. 略歴は拙稿「ギュリック」（『新潟県大百科事典』）を参照。
7. Letter of J.H. Pettee, Jul. 11, 1883.

パームが新潟を去るため,[8] 人選が急がれた。議事録によれば，5月9日に京都で最初に新潟の件が協議された時に「デビス (Robert Henry Davis)[9] 家ともう一家族」とを，現地を視察させたうえで派遣することがすでに全員一致で決議されていた。「もう一家族」がギュリック家と決定したのはそれから1カ月以内のことであった。6月11日に神戸を出発した下見隊にギュリックが妹 (Julia A. E. Gulick) と共に参加しているからである。[10]

R. H. デビスは1878年の来日以来，これといった特別の任務を神戸で見出しえなかったので自他ともに転任の必要性が認められていた。[11] その点，ギュリックは50歳という年齢に加えて「七一雑報」の責任者であったので最初から候補者にはのぼりにくかった。[12] ただ，たえずパイオニア精神にあふれるギュリックには，新潟に赴任すれば毎年1回は北海道(とくに浦河)へ出張できるとの望みがあった。[13] 妹のジュリアの場合は，同居の母親の死(5月24日)が住みなれた神戸を去る決心をさせた。[14] 以上の3名に家族を加えた総勢11名が新潟ステーションの活動を始めたのが1883年10月11日であった。[15]

ところが，このステーションは発足の時点からのちのちまで日本ミッションとの間で複雑な確執を生む2つの問題をかかえこんでいた。人事とミッション設立問題とである。

まず人事の方であるが，先に見た人選の背景にはミッション内での相当に複雑な事情が介在していたようである。たとえば同志社のデビスは，R. H. デビスとギュリックとが京都での自分たちの事業(同志社)にまったく否定的で，ことごとに反対をくりかえすとの苦情を洩らしていた。[16] また，ペティは公表できないと断りながらも先の人選ならば日本ミッションに打撃を与えずに新潟に人を送れる，と言明している。彼は新潟進出に賛成する私的な理由として次の3点，すなわち会衆派の勢力拡充，新潟に資産をもつことの有利性と並べて「人と資金との有効利用」(a better economy of men and money) をあげている。デビスを教育活動から新しい仕事(伝道)にふり向ける好機会であるうえにギュリックの「英雄的な行為」(heroism) にも期待したい，というのである。[17]

R. H. デビスは同僚たちのこうした雰囲気を敏感に感じとったのか，新潟をひきあげて帰国した直後，日本ミッションに対する不満(後述)をいくつか洩らしている。その中には，自分たち(彼とギュリック)の「伝道方針のあやまりを罰するために」日本ミッションは自分たちを新潟に追いやったのではないか，との憶測があるのは見逃せない。[18] 「やっかい者払い」とはもちろん言い過ぎであるが，さりとてその要素を完全に否定しさることもまた困難であるように思う。

次に，人事と並んでミッション設立問題もまた大きな後遺症となった。新潟ステーションは日本ミッションの5番目のステーションとして開設されたはずであるが，アメリカン・ボードの本部(ボストン)の方針は日本ミッションとは別組織，すなわち「北日本ミッション」に属させるというのである。このくいちがいは，結論を急ぐ必要上ボストンの幹事，クラーク (Nathaniel G. Clark) からの承認を電報で受けとったことに起因する。[19] 9月9日に神戸で受理した本部からの電文は，日本ミッションが指定した「承認」(“Resolute”) ではなく「承認，委細後便」(“Resolute: Details, Letter”) で

8. 拙稿「医療宣教師パーム 上,下」(『新潟日報』1983年9月28日，29日)。
9. 略歴は拙稿「デビス」(『新潟県大百科事典』)参照。
10. R. H. Davis, Report of the Northern Japan Mission of the A. B. C. F. Mission, 1884 (以下, N. J. M., First Annual Report として引用).
11. F. A. Lombard, Japan Mission History (unpublished typing), p. 103.
12. 「七一雑報」はギュリックの転出により廃刊に追いこまれた(同志社大学人文科学研究所編『「七一雑報」の研究』，同朋舎，1986,33ページ)。
13. Letter of O. H. Gulick, Aug. 2, 1883.
14. Letter of J. Gulick, Jul. 16, 1883.
15. N. J. M., First Annual Report.
16. Letter of J. D. Davis, Nov. 19, 1883.
17. Letter of J. H. Pettee, Jul. 11, 1883.
18. Letter of R. H. Davis, Nov. 25, 1887.
19. Letter of O. H. Gulick, Sep. 18, 1883.

あった。[20]

3週間後に新任地にとどいた「後便」で初めて新ミッションの設立を知らされたギュリックとデビスとは大きな衝撃を受けた。ギュリックは，日本ミッション中，分離を予想したものは皆無であろうと述べ，デビスと2人では単独のミッションを形成できるはずはないから辞任したい，と激しく抗議した。[21] デビスもまた，本部の方針をさきに知らされていたならば誰も新潟に来るものはいなかったであろう，と新ミッション設立に反対であることをクラークに訴えた。[22]

この点は日本ミッションの反応もほぼ同じで，「分離は遺憾」とのペティの所感[23]が代表的なものと見てもよい。ただ，会計のジェンクス (Dewitt C. Jencks) だけは例外で，新潟のメンバーをはじめ他の同僚がなぜ反対なのか理解に苦しんでいる。[24] 同志社のデビスはその中間的な反応を報じている。すなわち，新潟が日本ミッションから切り離されたのは当初は「私たち全員の驚き」であったが，のちにはほとんどのものが分離策は賢明で摂理にかなっているとの受けとめ方をしているという。というのは，両者間の距離と通信の不便さとが最大の障壁であるうえに新潟のふたりは京都での事業に反対なので分離した方がお互いの「救い」である，というのである。[25]

それでは，なぜアメリカン・ボードは新潟を日本ミッションから切り離したのか。この時本部は財政難のためステーションの新設を認める余裕がなかった。日本ミッションからの強力な懇請（経費は11,000ドル）にこたえるためには「オーティス遺産」(Otis Legacy) を利用する以外にはなかった。ただ，この基金はミッションの新設のために，との条件がついていたために北日本ミッションを設立せざるをえなかったのである。[26]

こうして北日本ミッションは1890年に日本ミッションに統合される[27]まで7年間にわたって他のステーションと特異な関係をもち続けることになる。この間，1884年1月の日本ミッション特別委員会で両ミッションは年会を共通にし，またメンバーは本部の承認なしに相互に移動できるとの要求を本部に申し入れることを決めたのを手始めに，[28] 何度も合同策が協議されている。[29]

興味深いのは仙台ステーションの開設（1886年秋）のおりにも同種の問題が生じている。新潟のケースの反省からか，仙台は最初から日本ミッションに属した。[30] 同地のデフォレスト (John K. H. DeForest) は，この狭い島国にはひとつのミッションで十分との意見を有しており，仙台に続いて翌年，東京にグリーン (Daniel Crosby Greene) が転出すれば，新潟の孤立性は解消されるとの見通しをたてていた。[31]

II O. H. ギュリックの仙台進出問題

さて，T. A. パームは18カ月間の帰国休暇があければ，1885年の春には再び新潟に戻ってくるはずであった。けれども「終末論」が原因でパームはミッションを辞任したため再来日はならず，そのため新潟における彼の事業は伝道，医療（パーム病院）の両分野とも全面的にアメリカン・ボードに移譲されることになった。

もっともパームはギュリックやベリーに対しては日本に戻らない可能性，さらには戻っても仙台に転任したい希望を帰国前に表明していた。[32] R. H. デビスもまた1884年2月の時点で，パームが仙台に転出するかもしれないと感じていた。[33] 要するにパームはたとえ再来日しても，

20. N. J. M., First Annual Report.
21. Letter of O. H. Gulick, Nov. 28, 1883.
22. Letter of R. H. Davis, Nov. 13, 1883.
23. Letter of J. H. Pettee, Oct. 12, 1883.
24. Letter of D. C. Jencks, Oct. 30, 1883 ; *ditto*, Dec. 8, 1883.
25. Letter of J. D. Davis, Nov. 19, 1883.
26. Lombard, *op. cit.*, p. 104.
27. *Ibid.*, p. 107.
28. Minutes of a Special Meeting of Japan Mission, A. B. C. F. M. held in Osaka, Jan. 12, 1884.
29. たとえば Letter of O. H. Gulick, Jun. 29, 1885 ; *ditto*, Sep. 20, 1886 などを参照。
30. Letter of J. K. H. DeForest, Oct. 5, 1886.
31. *ditto*, Aug. 26, 1886.
32. Letter of O. H. Gulick, Feb. 18, 1884 ; Letter of J. C. Berry, Feb. 28, 1884.
33. Letter of R. H. Davis, Feb. 20, 1884.

かつて新潟で共に働いた押川方義が活躍する仙台で共に伝道したかったと考えられる。[34]

パーム辞任の知らせに誰よりも大きなショックを受けたのはこの押川ではなかったか。新潟時代から彼の生活・伝道費（月額30円にものぼった）はすべてパームの手を通してパームの父親が牧するスコットランド教会が提供していたからである。[35] この点からみれば，押川が仙台に転出後に組織した教会(仙台教会)を新潟の信徒たちが「仙台にある新潟分教会」と呼ぶことがあっても不思議ではなかった。[36]

同様に，こうした経済的な裏づけがあったからこそ押川は教派的には独立（ギュリックの言葉を借れば，世界のどの教会とも関係をもたない「完全な独立性」perfect independency)[37] を保つことが可能だったのである。これは押川の特殊な教派性を語るさいには看過してはならない点である。

押川はパームからの資金が打ち切られることを1885年4月1日ころにパーム本人から伝えられたようである。彼は急拠（計画中の学校設立のための資金募集をもかねて[38]）上京し，京浜地方の宣教師や日本人指導者たちと協議した。その結果，長老派の協力をとりつけることに成功したので22日に東京を発ち，28日に仙台に戻った。[39] これより仙台教会は急速に長老派色を強めることになる。

ちょうどこのころ，ギュリックは新潟から仙台への転出を企てていた。かねてより押川に魅かれていたギュリックはパームの願いもあって仙台行きを熱心に望むようになった。[40] そこで4月20日に視察のため仙台へ向けて出発したが，あいにく押川は上京中であった。押川が戻ったのはギュリックが仙台入りをしてから4日目のことで両者の会談はようやく翌29日に実現した。

押川にはセクトをつくる意向はまったくなく教会員ともどもギュリックの転任を歓迎してくれた。押川は「ギュリックの来仙を前もって知っていたら〔援助を求めに〕わざわざ上京しなかったのに」とギュリックに洩らしたほどである。[41] ギュリックにとっても経済的な支援をたたれたあとの押川がアメリカン・ボードやその外郭団体ともいうべき日本基督伝道会社に対して新しい関係を求めてくれることが最上の解決策と思われた。[42]

ところでギュリックは，クラークからの照会に対し仙台行きの理由を2つあげている。[43] 決定的なのは彼と家族との健康状態であるが，いまひとつは仙台の重要性であった。たしかにハワイで生まれ育ったギュリックにとっては越後の冬は厳しく，着任まもなく迎えた最初の冬にはすでに残留は無理との結論に達していたほどである。[44]

3月31日に在日アメリカ大使のビンガム(J. A. Bingham) に旅券の申請をする[45] 一方，ギュリックは日本ミッションの特別集会（3月24日)に仙台の件を提案している。が，席上，審議はいっさい行なわれなかった。[46] 日本ミッションの反応は意外に鈍かった。このあと先述のように4月20日に下見が決行されたのだが，本部の承認をも受けないままの行動であった。

視察のさなか，ギュリックは日本ミッション会計のジェンクスに書簡を送り，仙台に移る決心と仙台の好印象とを伝えたが，ジェンクスはかねての懸念がやわらぐどころかかえって強められたとの印象を抱かざるをえなかった。そこで指示を待つようにとの電報を打ちかえした。日本ミッションは，ギュリックの転出は認めるとしても，転任先は福岡と考えていたからである。[47]

34. 「パームの帰国」37ページ。
35. Letter of O. H. Gulick, Apr. 11, 1885.
36. 「七一雑報」1881年9月16日。
37. Letter of O. H. Gulick, Jun. 2, 1885.
38. *ditto*, Apr. 24, 1885.
39. *ditto*, Apr. 30, 1885.
40. Letter of O. H. Gulick to Masayoshi Oshikawa, Nov. 4, 1884 ; Lombard, *op. cit.*, p. 110.
41. 以上，Letter of O. H. Gulick, Apr. 24, 1885 ; *ditto*, Apr. 30, 1885.
42. *ditto*, Apr. 11, 1885.
43. *ditto*, Mar. 28, 1885.
44. *ditto*, Apr. 10, 1885.
45. Letter of O. H. Gulick to J. A. Bingham, Mar. 31, 1885.
46. Letter of O. H. Gulick, Apr. 10, 1885.
47. 以上，Letter of D. C. Jencks, May 8, 1885.

このとき日本ミッション中，ギュリックを支持したのは弟のギュリック (John T. Gulick)[48] くらいである。[49] 在米中の新島襄は北日本ミッションの拡張に意欲的であったのでクラークにあてて仙台と福岡とを同時におさえる必要があることを再三訴え出た。[50] 新潟のギュリックにとっては心強い味方であった。かれは新島の問題の書簡(抄)を入手したうえでクラーク相手に両面作戦よろしく仙台進出の件を熱心に交渉していた。[51]

このあと，4月の視察同様，日本ミッションとボード本部との正式な承諾をとらないまま，ギュリックは家族と妹とをひきつれて5月21日に新潟をひきあげ仙台に向かった。27日に仙台入りをしたかれらは，この時も押川や仙台教会員から歓迎をうけた。これ以前にギュリックは日本ミッションのアトキンソン (John L. Atkinson) やジェンクス，そして福岡で伝道中の不破唯次郎などから仙台よりも福岡へ移るようにとの手紙を受けとりながらも，決心を変えなかった。とはいえ，正式の赴任は6月中旬に予定されていた日本ミッションの年会(神戸)での協議をまたねばならなかった。ギュリックの見通しでは仙台の方が福岡よりも有利であった。ひとまず仙台から関西へ引きあげ，年会と避暑とを終えたのち秋から仙台で本格的な活動を開始する，というのが彼の当面の計画であった。[52] 帰阪の途上，6月5日にギュリックは横浜でオランダ改革派のバラ (James H. Ballagh) と，つづいて東京で長老派のトムソン (David Thompson) と面談を重ねた。前者はアメリカン・ボードの仙台進出には異議をとなえなかった。[53]

ギュリックの予期に反して日本ミッションの年会(6月15日)では，彼の転出先は福岡と決まった。その理由は①健康のためなら福岡の方が温暖，②仙台は長老派との摩擦が予想される，③有能な青年信徒は九州出身者が多い，④福岡の方が関西に近い，⑤福岡の不破夫妻（夫人はかつてギュリック家の一員）の熱心な招き，などであった。[54]

意外なことにギュリックはこの決定に対して感謝を表明している。むしろ自分よりもクラークの方が「いくぶん失望した」のではないか，とさえ述べている。[55]

彼は7月に現地を視察したうえで10月中旬に福岡に移り住んだ。健康上，また共に行くべき同労者がいないため，今では仙台に行くのが最善とは思わない，と以前の考えを捨て去っている。[56] ちなみに彼はこの後も岡山，熊本と移り住み，最後はハワイで活動した。

こうしたギュリックの転変ぶりを新島は「さまよえるユダヤ人」と厳しく非難している。[57] 彼の仙台進出をボストンできいた新島は，かねてからの伝道拡張案がいよいよ実現したことを心底から喜んだ[58] のもつかのま，日本ミッションが彼を福岡へ転じさせたことを知らされ，伝道事業を「こどもの遊戯」のように考えているミッションに対してもいきどおりを覚えている。なにがなんでもギュリックに仙台を死守させるべきであった。[59] 「O. H. ギュリック牧師が仙台にとどまる勇気や見識をもたなかったのは残念である。氏はなぜ仙台に行かれたのか。なぜそこにとどまらなかったのか。なぜあちこちと落ちつきなく動きまわるのか」，「彼の行動には一片の識見も計画もない。日本ミッションはなぜあのような身勝手さと落ちつきのなさとを氏に許しておくのか」と手厳しい。[60]

48. のちに(1890—91年)夫妻して新潟に移り北越学館で教師をつとめた。拙稿「新潟英学史事始め——ジョン・T・ギュリック 上,下」(『新潟日報』1984年9月2日，4日)参照。
49. Letter of J. T. Gulick, May 30, 1885.
50. Letter of J. H. Neesima, Jan. 10, 1885 ; *ditto*, Jan. 12, 1885 [『新島襄全集』(同朋舎，1986) VI, 248ページ以下].
51. Letter of O. H. Gulick, Apr. 10, 1885.
52. *ditto*, May 8, 1885 ; *ditto*, May 20, 1885 ; *ditto*, Jun. 2, 1885.
53. Letter of O. H. Gulick to Masayoshi Oshikawa, Jun. 5, 1885 ; *ditto*, Jun. 9, 1885.
54. Letter of O. H. Gulick, Jun. 16, 1885.
55. *ditto*, Jun. 29, 1885.
56. *ditto*, Oct. 28, 1885.
57. Letter of J. H. Neesima, Oct. 28, 1885 (『新島襄全集』VI, 285ページ).
58. *ditto*, Jun. 10, 1885 (同上，270ページ).
59. *ditto*, Jul. 30, 1885 (同上，275-277ページ).
60. *ditto*, Oct. 28, 1885 (同上，284ページ).

新島には知らされてはいなかったが，実は北日本ミッションの中でもギュリックは「身勝手さ」を発揮していた。彼の仙台行きは同僚のデビスの反対を無視して強行されたのである。[61] ギュリックは「勝手に」(at his own option) 新潟から「逃亡」(run away) したために新潟の信徒にも悪影響を残す結果になった，とデビスは伝えている。[62]

ギュリックはこの件に関しデビスと十分な協議をしたが，理解を得るまでにはいたらなかった。会計をつとめていたデビスが仙台移転に伴う費用(400ドル)の支出を拒否したため，ギュリックはやむなく日本ミッションの会計（ジェンクス)とかけ合わざるをえなかった。[63]

もともとデビスの方にも「日本ミッションでデビスといっしょに仕事ができる人はいない」との風評が立つほどの事情があったので，かねてギュリックとのおりあいは必ずしもよくなかった。[64] たとえば奨学金[65]やアメリカ聖書協会代理人[66]の件でも衝突がみられたところへ仙台の進出問題が加わり，両者の対立は決定的となった。デビスはこの時以来，当初の合併案をひっこめ，北日本ミッションと日本ミッションとの分離の妥当性を公然と主張し始めるにいたったほどである。[67] ちなみに新島は東北伝道にあたって，ふたつのミッションを別々の名称 (Central Japan Mission and Northern Japan Mission) で呼ばずに「ひとつのミッション」(the Mission in Japan) と考えるべきだ，と本部に提言している。[68]

Ⅲ D. スカッダーの韓国伝道計画

ギュリック家の転出とちょうど時を同じくして，医療宣教師のスカッダー (Doremus Scudder)[69] がアメリカから新潟に着任した。パームが希望したベリーの赴任はベリーの拒否にあった[70]ので，パーム病院のためにあらたに医療宣教師が必要となったのである。

スカッダーが姉 (Catharine S. Scudder) と共に訪日を希望していることがボストン（クラーク）から新潟(ギュリック)に知らされたのは1884年2月であった。[71] 人員不足に悩む北日本ミッションがふたりの新人に一刻も早く新潟に直行してほしいと願った[72]のは当然であるが，彼らの着任は予定より遅れに遅れ，しかもその任地も一時は白紙にかえるというありさまであった。[73] ようやく1885年5月13日に彼は姉を神戸に残して単身，転任準備のために新潟に足を踏み入れ，ギュリック家(旧パーム邸)の客となった。おりしも同家は1週間後にせまった仙台へのひっこし作業で忙しく，スカッダーは荷造りの手伝いに励んだ。[74] ギュリックが新潟を去る前日，神戸からスカッダーの家財がとどいたので，空屋となったばかりの旧パーム邸で荷ほどきにとりかかった。

スカッダーの任地に関していえば，来日前のスカッダーの候補地は中国であったが，本人はむしろアフリカ (Bihe Station) を望んでいた。自分の祖先が奴隷主であったことが主な理由であった。[75] 一方，インドでながく伝道に従事し

61. Letter of R.H. Davis, May 21, 1885; *ditto*, Nov. 30, 1885.
62. *ditto*, Aug. 28, 1885; *ditto*, Nov. 7, 1885.
63. Letter of O.H. Gulick, Apr. 10, 1885; *ditto*, Apr. 24, 1885; *ditto*, May 8, 1885.
64. Letter of D. Scudder, Jan. 12, 1889; Lombard, *op. cit.*, p. 107.
65. Letter of O.H. Gulick, Feb. 20, 1885.
66. Letter of O.H. Gulick to H. Loomis, May 9, 1885.
67. Lombard, *op. cit.*, p. 112.
68. Letter of J.H. Neesima, Oct. 28, 1885 (『新島襄全集』VI, 285ページ).
69. 略歴については拙稿「スカッダー」(『新潟県大百科事典』)ならびに *Who Was Who in America*, 1943-1950 (Chicago: Marquis Who's Who, Inc., 1975), II, 476 を，詳しくは拙稿「スカッダー家の人びと—— L.L. ジェーンズと熊本バンドをめぐって」(『同志社談叢』7，同志社社史資料室，1987)を参照。
70. Letter of O.H. Gulick to D. Scudder, Mar. 2, 1885.
71. Letter of O.H. Gulick, Feb. 18, 1884; *ditto*, Feb. 23, 1884.
72. Letter of R.H. Davis, Apr. 21, 1884.
73. Letter of O.H. Gulick to T.A. Palm, Aug. 30, 1884.
74. Letter of O.H. Gulick, May 20, 1885.
75. Letter of D. Scudder, Oct. 19, 1883; *ditto*, Nov. 4, 1883; *ditto*, Nov. 17, 1883.

たことで有名な父親 (Henry M. Scudder) は日本の大都市かトルコを勧めていた。[76] 任地が新潟と決まったのは1884年1月のことで，姉も同時に宣教師を志願した。ここで記憶すべきことは，すでにこの時点でスカッダーが日本での医療伝道に魅力を感じていないことである。[77] 出発の予定は何度も変更され，最終的にサンフランシスコの出港が同年12月19日，横浜着港は翌年の2月5日であった。[78]

来日後の最初の1週間で，スカッダーの見解は次に見るように大転換をとげた。[79]

彼はまず京浜地方でヘボン (James C. Hepburn) をはじめバラ，ノックス (George W. Knox), ルーミス (Henry Loomis) などの他教派の宣教師たちとの面会に努めた。その結果，「日本での医療伝道の時代は終った」という点でかれらがはからずも一致していることが判明した。とりわけ，医療宣教師の先達たるヘボンから「君はどうして医療伝道の仕事をしに日本に来たのかね。その時期はとっくに過ぎたのだよ」と忠告され衝撃をうけた。[80] おりしも季貞樹などの亡命韓国人との接触が深いルーミスから，医療伝道地としては処女地である韓国に目をひらかれた。

次にスカッダーは関西に赴き，京阪神で日本ミッションのメンバーと意見の交換をはかった。医療宣教師のテイラー (Wallace Taylor) は，もはやこれ以上医療宣教師は日本には不要という点でベリー(当時，休暇で帰国中)と一致していた。これに対し京都ではゴードン (Marquis L. Gordon) を唯一の例外として，依然として日本を医療伝道の好適地とみなしていることが判った。テイラーはこれをスカッダーから聞き，この点が日本ミッションの欠点のひとつ，と指摘した。[81]

さらに関西でスカッダーの新潟行きの心を鈍らせた人にショウ (Fanny J. Shaw) がいる。大阪のバルナバ病院の看護婦である彼女はかつてパーム病院でパームを助けた経験があった。そのショウが伝えるパームの見解は，はからずもヘボンのそれと一致した。現にパーム自身も帰国前には「日本は医療伝道に特に適した土地とは言えない」と断定していた。[82]

こうしてスカッダーの目は新潟から韓国へと決定的に方向転換をとげるにいたった。幸いそれより6週間後に旧知のアンダーウッド (Horace G. Underwood, 長老派) が渡韓を計画していた。スカッダーはこの機会をとらえて自費で現地を視察したい旨，本部に申し出た。ボストンの承認が4月末までにとれなければ，やむなく5月には新潟に赴くつもりであった。

以上が来日後の1週間に見聞したことに基きスカッダーが到達した一応の結論であった。ちなみに彼の変心を耳にした新潟のギュリックは，北日本では依然として医療伝道の必要性があるとしてスカッダーの赴任を切に望んでいた。これに対し，必要であればベリーが，あるいはアメリカン・ボードの後援をえてパームが新潟に行くことをスカッダーは提言した。[83]

スカッダーの心はあくまでも韓国に向けられていた。このことに関しクラークあてに進言することを横浜のルーミスはスカッダーから依頼された。スカッダーはルーミスに対し「あなたにお会いする前から(可能ならば)韓国に行くことを決めていた」と伝えたという。[84]

テイラーもまた同様の依頼をスカッダーから受けた。そこでテイラーは次の諸点，すなわちスカッダーの所見は関係者，とりわけショウの感化で来日後に一変したこと，新潟ステーショ

76. *ditto*, Nov. 22, 1883.
77. *ditto*, Jan. 14, 1884.
78. *ditto*, Feb. 13, 1885.
79. 以下，この件に関し断わりのないものは *ditto*, Feb. 13, 1885 に基づく。
80. D. Scudder, Report of the North Japan Mission for the year June 1, 1885 to May 31, 1886 (以下，N.J.M., Third Annual Report として引用).
81. Letter of W. Taylor, Feb. 16 1885 (以下，テイラー書簡は長門谷洋治氏の提供による). スカッダーの理解に反して，ベリーは1889年末の時点でも，少なくとも京都では医療伝道の使命は認められると考えていた (Letter of J.C. Berry, Dec. 18, 1889)。
82. *Quarterly Papers of the Edingburgh Medical Missionary Society*, May 1883 to Feb. 1887, 48.
83. Letter of O.H. Gulick, Mar. 6, 1885.
84. Letter of H. Loomis, Jul. 6, 1885.

ンに医師が不在となるのが唯一の問題であること，ケリー夫人はその解決策としてベリーをアメリカから新潟に呼び寄せるという提案をしていること，などをクラークに報じた。[85]

さて，スカッダーの韓国視察であるが，休暇を利用してテイラーも参加した。かれらはアンダーウッド（長老派），アペンツェル（H. D. Appenzel, メソジスト派）と共に3月31日に長崎を出港，4月18日に帰港した。スカッダーは「姉とふたりで行きたい。いや，行かねばならないと言わざるをえません。資金があればボードに頼まずに行きたいが，今の私はボードに依存せざるをえません」と旅行後はますます決意を固めている。[86]

同行したテイラーもまたアメリカン・ボードの韓国伝道には積極的であった。彼は再びスカッダーの要請で伝道地としての韓国について本部へ書き送った。テイラーから見れば，スカッダーは性格，能力ともにすばらしいうえ，同地で働くにはまったく適した人材であった。韓国行きの動機も十分首肯できるので，自分も若ければ同じ行動に移るだろうとの共感を示している。[87]

ところが，スカッダーの熱い祈りもテイラーの進言も効を奏さなかった。本部の返事は財政難のためか「否」であった。スカッダーは5月に神戸から陸路で新潟に向ったが，その足どりは重かったに相違ない。準備期間を含めて6週間近くを「無駄に」過したことを彼は残念がった。[88] かりにこの時，スカッダーの韓国赴任が実現していたら，彼は韓国伝道に着手したアメリカン・ボードの最初の宣教師であるばかりか，全ミッションを通し最初の医療宣教師たる栄誉を担ったはずである。

さて，スカッダーの新潟での活動であるが，こと医療伝道に関しては誠に消極的であった。詳細は別稿[89]に譲り結論だけを再述すれば，パーム病院は赴任の翌年に廃止された。

Ⅳ　自給政策と協力政策

パーム病院が閉鎖された翌日（1886年10月2日），北日本ミッションは新潟第一基督教会を創設し，伝道活動を本格化した。[90] ここにいたるまでには次のような苦闘があった。

パームが残した信徒たち（「パーム・バンド」と仮称）と北日本ミッションとの間には最初から摩擦が絶えなかった。原因はパーム・バンドの資質の悪さにあり，この点が他のステーションに見られぬ新潟の特殊性であった。

デビスが伝えるところでは，パームは病院会計の黒字（最終年には1000円）をわりあい自由に支出したため，パーム・バンドの中核には，彼に雇用された者や借金を負う者が目立った。こういう「信徒」たちはアメリカン・ボードに対しても，教会経費は全額ミッションが負担すべきであると主張し続けた。パームのこうした「慈善的な」伝道方法は教会外に相当知れわたっていたため，デビスらに対しても借金の申込みや金めあての受洗の申し出（なかには100マイル以上もの遠くから）がたびたびなされた。このため，日本人を伝道師として雇用したくとも，いわゆる「ライス・クリスチャン」として佛教徒たちから非難をうけるだけであった。[91]

教会をたかりの対象と考える「エセ信徒」，あるいは「にわか信者」たちは，生活の面ではアンチノミアニズム（Antinomianism, 道徳不要論）を盾に酒，タバコはもちろん，さまざまな罪悪にひたり続けた。[92]「教会員たちはウソをつき，盗み，遊女屋に通い，祖先の霊をまつり，日曜礼拝を冒瀆し，姦淫を犯し」というありさまであった。[93]「時には私たちはまったくうち

85. Letter of W. Taylor, Feb. 16, 1885.
86. Letter of D. Scudder, Apr.（日付不明），1885.
87. Letter of W. Taylor, Apr. 18, 1885.
88. Letter of D. Scudder, May 21, 1885; *ditto*, Apr. 25, 1885; *ditto*, Jun. 28. 1885.
89. 拙稿「アメリカン・ボード北日本ミッションの医療活動——D. スカッダーとパーム病院」（『地方史新潟』15，新潟県地方史研究会，1979）。
90. 拙稿「宣教師の見た創立期の新潟教会」（「新潟教会報」16，日本キリスト教団新潟教会，1976）。
91. R. H. Davis, Contribution towards Annual Report of the Northern Japan Mission of A. B. C. F. M. June 1, 1884—May 30, 1885（以下，N. J. M., Second Annual Report として引用）.
92. *Ibid.*
93. Letter of R. H. Davis, Apr. 8, 1886.

のめされ，時にはあきらめて辞職し，アメリカに帰りたくなる」とのデビスの嘆き[94]ももっともであった。

パーム自身も帰国の前には，「新潟は特に『そこにサタンの座がある』[ヨハネ黙示録 2：13]と言ってよい場所」であり，伝道上「不毛の土地」であることを認めていた位である。[95]

北日本ミッションは，パームに養なわれていた低資質の信徒たち(「アンチノミアン派」もしくは「放縦派」)と手を切り，新しく北日本ミッションの伝道方針のもとで教会に加わった人たち(「禁欲派」)を支援し始めた。パーム・バンドの分裂である。倫理的には高潔な生活を，経済的には自給的な教会運営を目指す「禁欲派」の動きが結実したのが，さきの新潟第一基督教会(現新潟教会)であった。

教会設立直後の10月14日，デビス家は急拠新潟を発ち，神戸から12月26日に帰国した。デビスは健康と7人の子供たちの教育とのほかに長老派に対する日本ミッションの（教会合同に関する？）態度，それに日本ミッションの財政政策を帰国の理由としている。[96]

前にも触れたように，日本ミッションの非協力性はデビスにとって常に不満の種であった。たとえば，日本ミッションに関係する日本人信徒が北日本ミッションを攻撃しても放置しておいたこと，自給論に基づきアメリカン・ボードの資金を日本人のために使わないことに無理解であったこと，孤軍奮闘の自分たちに同労者を派遣してくれなかったことなど，いずれも共感の欠如を示すに十分であるという。[97]

不信の中ではとりわけ財政政策への批判が大きかったはずである。3年間の新潟伝道でデビスが目標としたのは霊的で自給的な教会形成という一点であった。[98] ところが，日本ミッションは(スカッダーの言葉を借りれば)「協力政策」(cooperative policy) をとり北日本ミッションの「自給政策」(self-support policy) と大きく対立した。[99]

もともとアメリカン・ボードは日本ミッションの発足にあたって「独立自給のキリスト教会」の形成を第一の目標とした。にもかかわらず，日本基督伝道会社の組織後，新島襄の影響もあり徐々に自給色をうすめ，レヴィット (Horace H. Leavitt) や沢山保羅から批判を受けるにいたった。

両ミッションの財政政策にくいちがいが表面化したのはパーム・バンドの今裂過程においてであった。「禁欲派」が「アンチノミアン派」とわかれ，集会場の家賃や経常費を自己負担し始めたとき，「他のミッションの干渉や日本ミッションの後援者たちからの反対に出くわさなければ」理想とする自給的な教会が実現するはず，とスカッダーは期待していた。

ところが，1886年6月にデフォレストが海老名弾正と共に新潟を訪れ，日本ミッションの財政政策が紹介され，勧められた。その結果，「信徒たちは自給の理想をまったく放棄してボードからの援助を熱望するようになった。かくして2，3カ月前の勇気ある態度をまったくひっくりかえしてしまった」。[100] このときデビスとスカッダーとは，デフォレストらに自分たちの主張を強く訴えたが，最終的には次の4点を確認し，妥協せざるをえなかった。[101]

①日本ミッションが信徒に援助している以上，新潟の信徒だけを例外にはできない。

②日本ミッションと同一歩調をとらなければ新潟以外の会衆派諸教会との一致は困難。

③日本ミッションよりも金をかけない北日本ミッション伝道策に対して日本人指導者の中に強い偏見があり，その根絶は無理である。

94. N.J.M., Second Annual Report.

95. *Quarterly Papers of Edinburgh Medical Missionary Society*, May 1879 to Feb. 1883, 307；『東中通教会史』(東中通教会，1975) 53-54ページ。

96. Letter of R.H. Davis, Nov. 25, 1887.

97. *Ibid.*

98. *Ibid.*

99. N.J.M., Third Annual Report.

100. *Ibid*; D. Scudder, Report of the Northern Japan Mission From August 1st 1886 to June 30th 1887 (以下，N.J.M., Forth Annual Report として引用).

101. Letter of D. Scudder, Jun. 18, 1886.

④日本ミッションや日本基督伝道会社との協力関係は新潟へ日本人牧師が派遣される可能性を大きくする。

北日本ミッションにとっては，これは明らかに政策の根本的な転換である。スカッダーにとってはこれは両ミッションの協調を最優先させるための譲歩であって，自給政策の誤まりを認めたわけでは決してなかった。[102]

それが証拠にスカッダーはこの直後，自説の正しさを論拠に辞任を本部に申し出た。ボードの資金は日本人の援助には1セントたりとも使うべきでないというのが彼の基本方針で，レヴィットやデフォレストにも共通するという。これからみれば，日本基督伝道会社のようにボードが資金の80%をも出資するような協力政策は基本的にまちがっている。このため彼は「自給に基づくミッション」で日本以上に宣教師を必要とする任地，たとえば中国の山西 (Shansi) への転出を望むにいたった。[103]

8月の上旬，日本ミッションの年会でスカッダー姉弟の辞任理由書が披露されたが，日本ミッションの伝道方法について誤解がある，と議事録には記入されている。関西の宣教師たちはスカッダーからの批判を的はずれと考えたかったに相違ない。

かくして新潟赴任わずか1年にしてスカッダーの目はまたも外国(こんどは中国)へ向けられた。クラークも今回は，任地はともかく，許可を出さざるをえなかった。6月5日に電報 (“Transfer”) を受理したスカッダーは早速2，3日後に荷づくりを始める心づもりであった。[104] 日本ミッションの財政政策はデビスに続いてスカッダーをも新潟から追いやろうとしていた。

これに対して日本ミッションの准宣教師たる新島襄[105]は協力政策の積極的な信奉者であった。「金を惜しむと最良の働き人を失う」との信念から，彼は名指しこそしてはいないものの明らかにレヴィットの自給論を「あわれな近視眼的な政策」と痛罵した。[106] したがって，新島は新潟の信徒たちに対しても「アメリカン・ボードはどこまでも経済的な援助をする用意がある」と早くから言明して「アンチノミアン派」を喜ばせている。[107]

新島によれば，北日本ミッションの政策は「とにかく独立自治を論じ，モニー [money] を出さぬことを手柄となす」まちがったやり方であり，「惜しまずモニーを散する覚悟」が必要であった。「伝道者雇入の為にはモニーがなくてはならず，新潟のミッショナリー先生方には新潟県下一円に伝道拡張の見込はなきか」との新島の慷慨は，すでにみた新潟の特殊性——伝道師の雇用さえ「メシの種」との攻撃材料を反対派に与えかねない——の無知からきている。[108]

そのうえ，新島はどこまでも会衆派の人であった。1886年のはじめ，日本人の伝道者を高田(新潟県)に派遣する計画が長老派にあるのを知るや，ただちにクラークとスカッダーとにあてて「同地は当然，新潟[北日本ミッション]に所属」すべき地なので早急に先手を打つよう要請した。[109] これに対してスカッダーは，「自給主義に基づく」教派ならば誰でも歓迎したいと表明し，新島との隔の大きさを示した。[110]

以上からわかるように，自給政策は北日本ミッションの伝統であった。この点からみるとき「禁欲派」が新しく組織した教会の初代牧師に成瀬仁蔵を招いた意味は大きい。彼は会衆派の中でもっとも強く自給論を主張したレヴィットと沢山保羅との精神をそっくり受けついでいたからである。成瀬は，新潟の事情に詳しい

102. N.J.M., Third Annual Report.
103. Letter of D. Scudder, Jul. 9, 1885 ; *ditto*, Jun. 18, 1886 ; *ditto*, Aug. 14, 1886.
104. *ditto*, Sep. 8, 1886.
105. 新島の新潟伝道へのかかわりについては拙稿「新島襄と新潟伝道」(『新島研究』47，同志社新島研究会，1976)を参照。
106. Letter of J.H. Neesima to A. Hardy, Sep., 1879，日付不明(『新島襄全集』VI，193ページ).
107. N.J.M., Second Annual Report.
108. 拙稿「アメリカン・ボード北日本ミッションと沢山保羅」(『沢山保羅研究』6，梅花学園，1979)，47ページ，以下，「沢山保羅」として引用。
109. Letter of J.H. Neesima, Jan. 30, 1886 (『新島襄全集』VI，296ページ) ; Letter of D. Scudder, Apr. 28, 1886.
110. Letter of D. Scudder, Apr. 28, 1836.

「デフォレスト牧師の尽力と個人的な懇請とによって」[111] 選任されただけあって，新潟に赴任以後，自給をめざす教会形成に努力を傾け，デフォレストを満足させている。[112]

成瀬の師，沢山保羅はひと夏，新潟伝道に直接従事したこともあり，その自給論は北日本ミッションに大きな感化を与えた。[113] 一方，レヴィットにも北日本ミッションで働く可能性があった。彼はあまりにも純粋な自給論のゆえに日本ミッションの中で孤立し，ついに本部からの帰国命令により1880年にアメリカに呼びかえされていた。[114] 新潟での人手不足を解消するためまた自給論に魅力を感じてギュリックは1884年2月にレヴィットをカーティス (William W. Curtis) と共に新潟に派遣してくれるようクラークに要請した。[115] この直後，休暇で帰米中のベリーはアメリカでレヴィットに会い，彼が依然として日本に心を寄せていることを確認したうえでクラークに対して，北日本ミッションの願いをかなえるとともに「自給の考えを実践したいとの彼らの願いを無視しようとする気持がまったくないことをボードが示す」ためにもレヴィットを新潟に送るよう進言した。[116]

この時，岡山のペティもまた，ギュリックやR.H. デビスを含めてミッションの願いとしてレヴィットを日本(新潟)に再派遣してくれるようクラークに依頼した。ペティは，レヴィットをかつて帰国させるにいたった「過去」を忘れ，クラークとアメリカン・ボードの評議員会との「許し」を請いたい，とつけ加えている。[117]

理由はさだかではないが，この時レヴィットの再来日は実現することなく終った。彼が加われば「自給政策の砦」ともいうべき新潟ステーションはその性格をさらに強めたことであろう。

ところで，スカッダーの動向に戻ると9月に辞任が認められた時点ではその秋にスカッダー姉弟が，そして翌春にはデビス家が転出する見込みであった。ところが後者の健康状態は越後の冬をとても越せないほど悪化していることが判明したので，転任の順序を逆にせざるをえなくなった。この冬，姉とただふたり残されたスカッダーは，「もちろん私は日本ミッションの一員になりたくはありません。北日本ミッション丸が意気揚々と来春，沈没するまでこの船にどこまでもしがみつくつもりです」と決意を表明している。[118]

スカッダーはデビス家の見送りをかねて神戸まで赴く機会をとらえて，日本ミッションのメンバーたちと辞件問題を話し合うことができた。[119] その結果，留任を望む声が強く，また北日本ミッションが正当と考える方法でまったく自由に活動することが許されたために，スカッダーの辞任はひとまず延期されることになった。「ボードの金庫をあてにしないから留まって支援してほしい」との声が日本人信徒から出ないかぎり，スカッダーとしてはそれ以上の留任はありえなかった。[120]

一方，新潟第一基督教会の信徒たちにとって，宣教師がまったく不在となったこの秋は，財政問題を討議する好機会となった。協議の結果，さきに決めた協力政策はひとまず翌春までその実施を見送ることにした。[121] こえて1887年の1月，成瀬とスカッダーとの説教をうけて教会の役員たちは礼拝後，ミッションの援助を一切求めないとの「英雄的な決定」を行なった。ここにスカッダーは辞任をとり消し，喜んで留任を決意した。[122]

こうしてスカッダーの2度目の辞任問題もようやく決着がつき，北日本ミッション丸の沈没という最悪事態は回避されたのである。

スカッダーが留任を決めた1887年1月は，お

111. N.J.M., Forth Annual Report.
112. Letter of J.K.H. DeForest, Aug. 26, 1886; *ditto*, Oct. 5, 1886.
113. 詳しくは「沢山保羅」参照。
114. 笠井秋生・佐野安仁・茂義樹『沢山保羅』(日本基督教団出版局，1977) 130ページ。
115. Letter of O.H. Gulick, Feb. 20, 1884.
116. Letter of J.C. Berry, 日付不明 (Jun. or Jul., 1884. 長門谷洋治氏の提供による).
117. Letter of J.H. Pettee, Jun. 17, 1884.
118. Letter of D. Scudder, Sep. 17, 1886.
119. *ditto*, Oct. 8, 1886.
120. *ditto*, Nov. 25, 1886.
121. N.J.M., Forth Annual Report;「沢山保羅」43-44ページ。
122. Letter of D. Scudder, Jan. 25, 1887.

りしも新潟に男子校(北越学館)と女子校（新潟女学校）とを設立しようとの計画が教会内でもちあがった時期でもあった。両校の設立運動にスカッダーは最初から深くかかわらざるをえなかった。[123]

この年の春と秋とに開校するふたつの学校のために，スカッダーが全力を傾けて協力者の応援を本部に再三再四求めた結果，彼の両親をはじめ，新たに10名ものメンバー[124]がアメリカからかけつけた。新潟ステーションは沈没するどころか，京都ステーション(同志社)につぐ大所帯にいっきに成長したのである。

かくして1889年秋にC. S. スカッダーの病気のためスカッダー家の人びと5人が帰国したのを手始めに，日本ミッションへのメンバーの転出が続くまでの2年間，北日本ミッションは黄金期を迎えた。

ただ，スカッダー以後のメンバーは財政政策に関し，必ずしも彼と同意見の者ばかりではなかった。1888年6月，スカッダーが新婚旅行で不在中に，同僚のニューエル (Horatio B. Newell)[125] とアルブレヒト (George E. Albrecht)[126] とは自給政策を「一挙に」廃し，教会のためにボードの資金を援助することを決めた。スカッダーは「新潟だけに新しい」この政策，すなわち他ステーションではすでに周知のあの協力政策の採用にはやはり同意できず，ミッションの伝道委員を辞任してしまった。[127]

1890年，北日本ミッションは日本ミッションと合併した。財政政策を始めとする両ミッション間の軋轢は，ようやくここに終止符が打たれたのである。[128]

123. 北日本ミッションの教育活動，とりわけスカッダーの働きについては次の諸論考で考証ずみである。
「『宣教師レポート』に見る新潟女学校と北越学館1-19」(「敬和」89-171，敬和学園高等学校，1975-83)。
「私立新潟英学校から北越学館へ」(『敬和の教育』2，敬和学園高等学校，1979)。
「北越学館仮教頭・内村鑑三の誕生」(同上3，1980)。
「D. スカッダー書簡に見る北越学館事件　上，下」(『内村鑑三研究』11，12，内村鑑三研究会，1978)。
「内村鑑三と加藤勝弥」(同上16，1981)。
「北越学館事件をめぐる五つの英文資料」(同上19，1983)。

124. スカッダー (Henry M. Scudder) 夫妻，ケンドール (Eliza C. Kendall, のちに D. スカッダー夫人)，アルブレヒト夫妻，コザッド (Jane Cozad, のちにニューエル夫人)，コザッド (Gertrude Cozad)，ジャドソン (Cornelia Judson)，ニューエル，グレイブス (M. Louise Graves) を指す。

125. 略歴は拙稿「ニューエル」(『新潟県大百科事典』)を，新潟での活動については拙稿「H. B. ニューエルのこと」(「いずみ」45，日本キリスト教団長岡教会，1983)を参照。

126. 略歴は拙稿「アルブレヒト」(『新潟県大百科事典』)を参照。

127. Letter of D. Scudder, Jan. 12, 1889.

128. 全期間を通しての新潟ステーションのメンバーについては，拙稿「近代新潟の外国人——プロテスタント宣教師を中心に」(『にいがた』17，新潟県立図書館，1982) ならびに拙編『写真で見る新潟教会の歩み 1886-1986』(新潟教会，1986)の附表を参照。